

心の底から新たに

奨励	山田 有信〔やまだ・ありのぶ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団牧師

そこで、わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。そして、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけてとどまるところを知りません。しかし、あなたがたは、キリストをこのように学んだのではありません。キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだはずです。だから、以前のような生き方をして情欲に迷われ、滅びに向かっていてる古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。

だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。

(エフェソの信徒への手紙 4章17―25節)

はじめに

「心の底から」新しくされるということが、もし本当にあるとしたら、それはということなのでしょう。一緒に考えてみたいと思います。 あるとき、私は教会である方からこんな質問を受けました。「神は見えないのに、どうやって信じるのですか」と。そのとき、私の頭には、新約聖書にあるヘブライ人への手紙という文書の10章1節「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」という言葉が浮かびました。それで、私はその方に、「神というのは、見えないからこそ、私たちが信じるべき相手なのではないでしょうか」と答えました。まあ、分かったような、分からないような、答え方をしたわけです。でも、その方はそれで納得したりはしませんでした。私は、それからしばらくの間その方と話を続けましたが、話はほとんどかみ合いませんでした。何を話したのかさえ、今ではもうほとんど覚えていません。

鏡川大橋

それからしばらく経ったある日、その方がどうして私にそんなことを質問したのか、そしてその質問が何を意味していたのか、なぜ話がかみ合わなかったのか、その一端がほんの少しだけ分かったような出来事がありました。私はその方から、あるお店へどうやって行けばいいのか、その道順を聞かれたのです。そこで私はその方に、分かりやすい目印を示して道順を説明しようとした。

まず目印として、そこにしばらく住んでいる人なら誰でも知っているはずの大きな橋を説明し始めました。当時の私の住まいのあった高知市内には鏡川という大きな川が流れていて、いくつも橋が架かっています。そのなかには、「鏡川大橋」という高知市内でも一番目か二番目に大きな橋があります。それでその方に、「鏡川大橋」を通して、お店へ行く道順を教えようとしたのです。ところが、何度説明しても、その方は「鏡川大橋」がどこにある橋なのか分かってくれませんでした。もちろん、私の説明もそんなに上手なわけではありませんから、そのせいもあるのだと思いますが、それにしても全く通じませんでした。「鏡川大橋」へはどこを通して行くのかということとを、丁寧に説明しているつもりだったのですが、いくら説明してもその方は分かってくれないのです。私は、説明している途中で何度も、もう無理だと思いました。言葉で説明しても、地図を書いてみてどうにもなりません。でも、そうこうしているうちにやっと分かってきたことは、どうやらその方には「鏡川大橋」と他の橋との区別がついていなかったということでした。その方はしきりに「それは赤い橋なのか」とか、「路面電車が走っている橋なのか」などと聞かれるのです。それに対して私が、「そうじゃなくて白くて大きな橋です」と答えると、「白い」という部分でやっとわかってくれたようでした。

改めて聞いてみると、その方にとって「鏡川大橋」は「白いすべり台の橋」であり、正式な橋の名前はほとんど意味のないものだったのです。また私が懸命に説明していた、橋への道順、つまりその橋がどこにあるのかということも、その方には通じやすいものではなかったのです。むしろ無意味なものだったといえるでしょう。その方にとって大切なことは、その橋の名前でもないし、橋がどこにあるかということでもないのです。そんなことよりも、その橋がどんな橋なのかということが大切なことだったのです。その橋がどのように見えていて、その橋を通るときに自分がどう感じるのかということが重要だったのです。もう少し詳しく言うと、その方にとって、「鏡川大橋」というのは、そこを通るたびに、「この橋が、もしすべり台で、そこをシュートすべり降りることができたら気持ちいいだろうなあ」と感じる橋なのだそうです。ところが、私は、その「鏡川大橋」をそれまでに何度も見ていたのですが、一度もすべり台を連想したことはなかったわけです。実を言うと、なぜ「すべり台の橋」なのか、今でもあんまりピンときません。「鏡川大橋」というのは交通量も多くて、しかも橋の下を船が行き来するような橋なので、橋そのものがアーチ型で、さらにその上にまたアーチ型の構造物があります。ですからその形が、その方にはそう見えるのかもかもしれません。でも、私にとって、その橋は単なる一つの橋にすぎませんでした。その橋がどこにあって、そこを通るとどこへ行けるのかということだけが、私にとっては重要なことだったのです。そんなふうに、同じ「鏡川大橋」を、私とその方とはまったく違った見方、捉え方をしているわけですから、話が通じないのも当然だったのかもしれない。

そのことを踏まえて、以前の「見えない神をどう信じるか」という質問を考えてみると、今では、私は「その質問の内容を、もっともっと掘り下げて考えなければならなかったんだなあ」と思われるのです。そもそも神が見えないというのはどういうことなのか、人間にとって見えるというのはどういうことなのか、信じというのはどういうことなのか、そして、それらのことが、その方ご自身にとってはどういうことなのかをもっと深く聞く必要があったのです。決して、信仰とは何かとか、神が見えないとかということが、キリスト教という宗教で一般的にどういうことなのかということが重要なわけではなかったのです。

異邦人

先ほど読んでいただいた聖書箇所では、「異邦人」と「あなたたち」と呼ばれる人びとが対比され、また「古い人」と「新しい人」が対比されて語られています。「異邦人」というと、聖書のなかでは一般的に、ユダヤ人ではない人びとか、キリスト者・クリスチャンではない人びとを指す言葉です。けれども、このエフェソの信徒への手紙という文書のなかでは、ちょっと違っているように思います。もちろん、「異邦人」を非ユダヤ人・非キリスト者など考えることもできますけれども、例えば、この聖書箇所の言葉に即して「愚かな考えに従って歩み、知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れて」いる者として、「異邦人」という言葉をもっと広く考えた方が、このエフェソの信徒への手紙の著者の伝えようとするのが豊かなものになるのではないかと私は思います。

もしそうすることが許されるなら、先ほどお話ししたことで言えば、私自身は、まさに、ここで言われている「異邦人」なのだなあと思うのです。「鏡川大橋」という橋が相手にとってどういうものなのかということを無視して、どこの道路をどっちへ向いて何メートル行ったところにある橋だ、といくら正確に説明できたとしても、それは相手に通じるはずはなかったのです。相手に一般的な教え方を押しつけるのは、ここで語られている「愚かな考え」ですし、「無知とその心のかたくなさ」がさせることだと思います。例えば、「鏡川大橋」という橋を相手がどういうふうに見ているのかということを全く知らずに、どの道をどの方向にどのくらいの距離を行ったところにある橋だと説明しても、決して通じることがなかったように、「神とはこういうものだ」と聖書に書いてあります、信じるとはこういうことです」と、いくら正確に上手に説明できたとしても、それではやはり「愚かな考え」に基づく、「無知」と「かたくなな心」からくる、一方的な押しつけになってしまうのだと思います。

キリストに結ばれて

聖書のこの手紙は、私たちに強く勧めています。「もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。・・・(略)・・・古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、・・・新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい」。ここで古いとか新しいとか言われているのは、ただ時間的な問題ではないと思います。古い知識はだめで、新しい考えが必要だということではないのです。ここで言われているのは、絶えず「キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられる」ということです。キリスト教に入信したら私はクリスチャンです、ということだけなら、それは「異邦人」のように歩むのと同じです。例えば、結婚して夫婦になったのだから、夫は夫としてこうあるべきだとか、妻は妻としてこうあるべきだと言うだけなら、それは古い生き方です。

そうした古い生き方に縛られた古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を身に着けるために、絶えず「キリストについて聞き、キリストに結ばれて」、真理を学ぶ必要がある、と手紙は私たちに語っています。キリストに結ばれるというのは、キリストが自分にとってどんな相手で、何をしたのかということをも自分自身で知ろうとすることだと思っています。イエスのまなざしから何がどう見えて、イエスが何を感じていたのかということに自分自身が迫ることだと思うのです。私たち自身が、イエスのまなざしから自分を見て、キリストのまなざしのなかで自分を捉えて、行動することだと私は思っています。それは、「救い主」（キリスト）はこうであるべきだとか、神はこうあるべきだとか、神を信じる者はこうであるべきだとかいうことを相手に押しつけようとする「無知」と「心のかたくなさ」を捨てて、イエス自身と私たち自身が向き合うことだと思っています。

そして、同じようなことが、私たちそれぞれの隣人との間にも言えるのではないでしうか。この手紙は「それぞれ隣人に対して真実を語りなさい」と勧めています。でも、「真実」を語るためには、目の前の一人の隣人がものをどう見て、どう感じているのかということとを、私たち一人ひとりが追及して、その都度身に着ける必要があるのではないのでしょうか。同じ一つのものでも、人によって、捉え方・感じ方は全く異なります。神を信仰するうえでも、日常生活のなかでも、私たちには、もちろん、たくさんの知識が必要です。誰にでも通じるであろう、一般的な知識は確かに役立ちます。けれども、もっと大切なのは、私たちそれぞれの目の前の相手が、ものごとをどう捉えているのか、どう感じているのかという知識なのではないのでしょうか。もし、「心の底から新たにされる」ということがあるとしたら、それは私たちそれぞれの相手のもつイメージ・感覚を、私たち自身が共有できたときなのかもしれません。そして、きっとそれは、たくさんの知識や、新しい考え方を身に着けること以上に、私たちを全く新しくすることなのではないかと思っています。

